

# 無憂樹

## 『あたりまえ』

先月は浄尊寺の日帰り旅行(阿蘇)に、参加して頂いた皆さんと行くことができました。

思えばコロナウイルスが蔓延する前はあたりまえに行くことが出来ていたのですが、それができなくなり、今回5年ぶりに行くことができ、あらためて、あたりまえというのには有難いことだと教えてもらいます。

そう思っていた道中のバスの中で『あたりまえ』という詩を思い出しました。1979年に31歳で亡くなられた井村和清

令和6年11月号

浄尊寺  
熊本市西区田崎  
1-4-39  
TEL・FAX  
096-354-6530



さんの詩です。

井村さんは医師として病院で働かれていた時、右膝に癌が見つかります。転移しないように右足を切断され、リハビリ後、義足で仕事に復帰されますが、まもなく肺に転移が見つかります。その病床で『飛鳥へ、そしてまだ見ぬ子へ』という手記を残され、その中におさめられた詩です。その手記を残された3週間後に亡くられます。この時、長女の飛鳥ちゃんはまだ

1歳、そして奥様のお腹の中には2番目のお子様授かっておられました。

## 『あたりまえ』

あたりまえ  
こんなすばらしいことを、みんなはなぜよるこぼないのでしょう  
あたりまえであることを  
おとうさんがいる  
おかあさんがいる  
手が2本あって、足が2本ある  
行きたいところへ自分で歩いてゆける  
手をのぼせば、なんでもとれる  
音が聞こえて声が出る  
こんなしあわせはあるのでしょうか  
しかし、だれもそれを  
よるこぼない  
あたりまえだ、と笑ってします

食事がたべられる

夜になるとちゃんと眠れる

そしてまた朝がくる

空気をむねいっぴいにする

笑える、泣ける

叫ぶこともできる

走りまわれる

みんなあたりまえのこと

こんなすばらしいことを

みんな決してよるこぼない

そのありがたさを知っているのは

それを失くした人たちだけ

なぜでしょう

あたりまえ

和清

今日1日のあたりまえを、有り難いと受けとめて過ごす  
いきたいものです。